

## 禪門の儀礼(一)

長谷部好一

### (一) 禪の儀礼の構造

宗教的活動は何等かの形で儀礼的なものを随伴するのが普通である。禪における儀礼の行修はいわば仏祖と自己とが精神的な交わりをなし、両者の間に対話の道をきりひらきゆく営みに他ならない。身口意の三業を調整し、威儀をして整齊ならしめ、儀を装う事によって精神的構えが整い、型の如く儀を行ずる、その過程に教理的解釈や複雑な論理的操作によっては解きほぐし得ない心のむすばれ、煩惱が断ち切られる思い、乃至は実感が得られ、そこに精神の充実、解放感が生れる。只管に打坐を行ずる当処に悟りの現成を見るところというのも同様な内的構造に

禪門の儀礼(一)(長谷部)

よるものといえよう。日常の進止節に当り、動静の如法なるは、「威儀即仏法・作法是宗旨」を標榜し行持綿密をもつて知られる曹洞禅だけでなく、臨済においても学道の基本的姿勢として重視されるところである。

およそ集団生活のあるところに秩序が必要とされ、秩序のあるところ、必然的に儀礼が生れる。無形なる法が叢林の修行者による集団生活の中に具体化し、社会的に機能することになるとすれば、和合衆としての僧伽の本然の態はまさに動静大衆に一如する整然たる威儀法式(註1)行礼の中にこそ見出しうるといっても決して過言ではないであろう。

自然の理に即した法儀を行ずることにおいて、法そのものが時間的流れと空間的拡がりの中に現成する(註2)。そこ

禪門の儀礼(一) (長谷部)

に仏祖の行持の主体的な表出、再現と宗教生活の創造がある。

儀礼は反復され持続される構造を有するのが例であるが、そこに生ずる薰習的効果によって法が、その実践主体の中に生きて働くものとなる。それが仏の威儀を行ふこと、行仏威儀であり、真如の体である祖師が威儀行礼を通じて用を現することと受け取られている。それを客観化して眺めた時、吾々はこれを禪の儀礼と呼ぶことになると思う。

けだしわれわれをとり囲む空間世界へ精神的內容が働きかけ、これを儀礼空間たらしめるところに儀が生れる。そこにおいて色、形、様態、緩急のリズム、テンポ、スピードなどの諸要素は内容を表現するに相応しい形に構成され、一定の儀が生れる。その形式が踏襲され、伝承護持される過程に定形化した礼が発生する。

儀礼は宗教的想像力を誘発し、その内容を豊かにし法悦をたかめ、信心を助成、増長する等の機能を担う。傍ら同信の徒としての自覚を喚起し参会者の個々に自らがそのメンバーであることを再確認させるなどの役割を果す。その点において儀礼はまさに視聴覚の諸要素を盛り

込んだ総合的布教の法であり、立体的で力動的な、そして有効な教化の手段ともなるものである。附随的にそれは教団の莊嚴に役立つと同時に政治権力の莊嚴に利用される可能性をも含んでいる。

ところで禪の儀礼(もしそう呼びうるならば)はそのような教化の資具としてよりも、あくまでも覚証体験の表現であり、法の人格化の道として、法が特定の人格とその行為を通じて具体化するところに成立し、仏祖の行履を意識的に主体化していくところに、究極的には無意識のうちにそれが自ら現成するまで行得、行取するところにある。法に叶った行動は自ら節をなし度を生ずる。その結果として儀法礼式が生れる。それは仏道を学し修してゆくかまえであり、同時に法そのものの具現であるともいえる。

禪の起源について語られる時屢々引合いに出される拈華微笑の話は仏法の第一義の挙揚であり、同時に、その成立の歴史的詮索は別として、禪的儀礼の起源とみなし得るであろう。

これに繋がるのは宗旨挙揚の儀としての上堂、説法、垂示、小參、晚參、布薩、行茶礼等であり、ここではそれを

便宜上修道行法儀礼（第一義儀礼）として一応區別しておきたい。

禅はあくまでも学道中心の宗教であるといえるが、しかし余りに学道面を強調し過ぎると俗社会から遊離することになる。少くとも社会との繋がりが疎遠となる怖れが生ずる。その為種々の儀礼法会の補助による調整が必要となる。それらを一括して讃仰供養儀礼（第二義儀礼）と名づけておきたい。

これは現実には ritual complex の形において極めて複雑多岐な展開を示しているからその全貌を明かにすることは容易な業ではないが、これらの法会は正覚を成せるもの、仏祖への帰投の情の表出であり、客体として成正覚者即ち仏祖を中心とした儀礼空間を醸成しつつ同行の者と共にこれに没入し、これと合一しようとする方向をもつ。そこに自ら威儀が生れ作法が定まり、諷経回向によって客体が荘嚴され、儀の昂まりが結果する。

こうした儀礼空間の設定構成の資具としてさまざまな道具が用いられる。法具にはシンボリックな意義を担ったもの<sup>(註3)</sup>、機能面を主とするもの<sup>(註4)</sup>があり、前者についてはその授受に儀式（伝香、拈衣）が随伴することが多

禅門の儀礼（長谷部）

く、chremathism に類した発想も認められる。

法会に類する儀式には一般にこれを客観化して見る時そこに若干の虚構性<sup>(註5)</sup>も認められるが、禅の儀礼は実践主体の側からすれば、威儀作法が即仏法として行修されるべきものである以上虚構性が介入する余地を許さない。

禅の学道の法、特に行住坐臥の四威儀を、行動定型を成文化して明示したものは云うまでもなく清規である。周知の如くそこには、禅門の修行者が学道に際して依拠すべき規矩準繩が、三八念誦、六諷経、打坐參禅はいうまでもなく行鉢、洗淨から日常の拳措進退の法に至るまで微細に述べられている。

司馬光（一〇一〇—一〇八六）をして「謂わざりき三代の礼楽、緇衣の中に在らんとは<sup>(註6)</sup>」と歎ぜしめたのは、実にこの清規の整備によるものであろう。

ただ儀式は定式化され慣行化された宗教的行動である以上、不可避的に固定化し、マンネリズムに陥り空疎な形式に墮する危険性を孕んでいる。これら第二義儀礼も禅の宗旨を挙揚する一法として行ぜられる時、結局は第一義的儀礼に帰一することになる<sup>(註7)</sup>。いわば両者は相関相補相即の関係にあるわけである。

禪が仏の慧命を、自らの魂の躍動の中に受けとめていく活潑潑地な実践的宗教であることを目指すものである限り絶えず定式化した儀礼を打ち壊し<sup>(註8)</sup>、根源に立ち帰り乍ら常に新たに法儀を創造していく努力が必要とされる日々の威儀作法を如法に行ずることを措いて他に禪はないという意味において、禪は優れて儀礼形成的宗教である。その反面空虚な形式的行動の繰り返しに陥ることを極度に警戒する儀礼否定的な宗教でもあるという矛盾した性格をもっている。その具体的な事例をわれわれは曹洞と臨済との一見相反した宗風に見ることが出来る。

行儀作法を重視する、特色ある曹洞禪の宗風は、眼蔵の行持洗面、洗淨、行仏威儀の巻をはじめ、赴粥飯法、對大己法等を含む永平大清規、道元禪師による多くの著作や瑩山清規その他からも窮い知ることが出来るが、一方臨済録、伝心法要、血脉論等には根源的な生々たる禪体験を保持させるため、<sup>(註9)</sup>儀礼に類する諸行を厳しく否定するような口吻が見えている。

しかしこれとて墮性的な反復行動としての、形式化した儀法礼式を否定したものであって、両者の家風の相違は結局原体験を強調するか、表現を重視するかの別に過

ぎない。

とすれば仏祖の行持、作法の実践を離れて禪はあり得ないのであって、三千の威儀六万の細行<sup>(註10)</sup>は根源的に禪より出で禪に帰する。従って儀式行礼は禪の多様な行相に他ならない。日常のすべての行為を仏作仏行として身心を挙して如法に行じもていくところに、法儀が単なる儀礼としてではなく行法、法の現成として受けとられ、それがひいては他を感動させ、信心を喚起し副次的に教化の役割をも果たすことになるのである。

〔註〕

- 1、「動靜一如大衆死生不離叢林拔群無益違衆末儀」永平清規弁道話。
- 2、「語黙動靜一切聲色盡是仏事」宛陵録、岩波文庫本 六八頁。行住坐臥、生活の全局面にさとのり現成を認める立場は原始仏教にまで遡る。早島鏡正「初期仏教と社会生活」三〇九頁。
- 3、法信として伝授される衣鉢や香など。
- 4、拂子、如意、曲録等の類。
- 5、無形なるものを造形化することに伴う虚構性、儀礼が莊嚴の手段となることに伴う虚構性。

- 6、史繩祖・学齋估、同様なことが程明道についても語られている。即ち彼が定林寺を過ぎ齋室での僧の威儀整齊なるを見て、「……尽くここに在り」と歎じたという。
- 7、追善供養の仏事が法要といわれるようになった理由もここにありと考えられる。



- 8、臨濟録「祇如諸方説六度萬行以為仏法我道見莊嚴門仏事門非是仏法乃至持齋持戒警油不潤道眼不明盡須抵償」岩波文庫本 八二頁。

宛陵録「作浄土仏事並皆成業乃名仏障」岩波文庫本 七八頁。

- 9、註7参照 「出家兒千劫学仏細行万却学仏威儀不得成仏」とあり、眼藏にも「先師尋常道我箇裏不用焼香礼拝念仏修懺看經祇管打坐辨道功夫身心脱落」と述べられている。仏経

- 10、碧叢集第四則に「金剛喻定後得智中千劫学仏威儀万劫学仏細行云々」とある。また八宗綱要には僧尼の戒に広中禅門の儀礼(一)(長谷部)

略の三種を建て、僧・尼についてそれぞれ三千威儀六万細行、八万威儀十二万細行とし、威儀を戒に基くものとする。けだし清規は禅の戒律であるといえるであろう。

## (二) 禅の儀礼の特色

以上は東海印度学仏教学会主催による學術大会でのシンポジウムの際提起した問題の要旨である。

儀礼は宗教学においては重要なテーマのひとつであり、この領域と少からぬ連がりをもつことになった関係もあって、いささか宗教学的な見方をも加味して禅の儀礼の構造について考えてみたいつもりである。その際、宗教学者の立場から二、三の点について個人的に疑義が提出せられ御助言を頂いた。

その一は、儀礼は日常的なものから区別されたところの、普段とは全く違って改まった生活のパターンの設定、非日常的なものにかかわる特殊な宗教的行動と考えられるが、祝禱念誦諷経は別として、行粥普請作務までも儀礼の中に含めて考えることの可否についてであり、その二は宗教儀礼にはそれぞれ中核をなすもの

禪門の儀礼(一)(長谷部)

があるが、禪の儀礼の場合中心となるものは何か、という事であった。これらの点について少しく再考したところを以下附記しておきたいと思う。

出家して求道の生活に入ることはいうまでもなく俗塵を離れ、恩愛を断ち俗的な生活と訣別することを意味する。禪の学道において威儀をして整齊ならしめ、規に準じて作法を型の如く行じていくことは、日常的な営みの中において俗的なものを意識的に否定していく具体性をもった宗教的活動であり、喫飯、用便というようなく卑近な日常的行為さえも聖化しようとするのは、俗的なものを徹底的に否定し、生活の全般を行仏道として莊嚴しようとする身心の構えに他ならないのである。従って威儀即仏法といってもそれは決して日常的なもの<sup>(註2)</sup>と非日常的なもの<sup>(註3)</sup>を無差別に同一視し、混同することではないと考えられる。

儀礼が個人的習性や社会的伝統によって規定される一定の形式をもつところの宗教的行動<sup>(註1)</sup>とみるならば、洗面<sup>(註2)</sup>、洗淨、行粥、開浴等にそれぞれ定まった作法がある以上、叢林での修行にあつては一挙手一投足がすべて清規によつて細かく規制されており、生活行為全体が儀礼的側面

を具えている<sup>(註3)</sup>と云い得るであろう。

ところが在家信者の場合には、例えば特別に時日を限定して八齋戒を遵守し、身を慎しむ<sup>(註4)</sup>というような形をとるから、「祭り」などの場合と同様に「聖」と「俗」あるいは「日常的なもの」と「非日常的なもの」との間に明確な区別が立てられ相違がみられ、<sup>(註5)</sup>それぞれの生活行動轉換の契機が際立って観察せられるが、出家者の学道は日常生活の全体をそのまま、聖化し莊嚴しようとする方向をもち、不断の、恒常的な精進が要請されるものである關係上、その中で日常的なもの<sup>(註6)</sup>と非日常的なもの<sup>(註7)</sup>とを区別して考えることは困難である。

禪のみならず仏教の場合には總体に聖と俗に係わる問題は出家者と在家者という形で対比してみるのが適切ではないかと思われる。

但しこのようない貫した集中的な修道生活にも大きな単位としては解制、小さくは除策というような形での解放はあるが、これとても一時的な休養に類するもので、学道修行は一生不離叢林を立て前とし非日常的な要素の介在を許さない。

このようにみると儀礼といつても、禪の場合それは行

の一環をなすもの、修行儀として、仏祖の行持修行の法として特殊な性格を具えているといふべきであろう。

また禪の儀礼の中心をなすものについては例えば、上堂の儀礼の場合、法座莊嚴、鳴版、擊鼓、役位大衆入堂、空座問訊、住持上殿、拈香、問訊、焼香侍者による代衆請法、白槌(註6)というような順序で儀式が進められ、身心の緊張が昂まってくる。

これに続く垂語、問答、提綱がまさにこの法儀の中核をなすものと考えられる。(註7)ただ儀礼としては寧ろ第二義儀礼に含まれるものが遙かに整備した儀礼の一般的形式を備えているとみられ、宗教学的な視点からの考察には適切であろう。

〔註〕

1、宇野田空『宗教学』三〇四頁。

2、禪苑清規 卷七 大小便利。入衆日用。正法眼藏 洗面、洗淨の卷。

3、しかし喫飯を例にとれば随飯の如く儀礼的要素の欠除したのももあり、開浴についても同様である。

4、中国では三長月齋、六齋、十齋等が、真摯な仏教信者によつて早くから実践されていたようである。わが国でも

禪門の儀礼(一)(長谷部)

六齋日に精神潔齋がなされ、後にこれが念仏と結合し念仏踊りとして普及した。

5、宗教は日常生活の中に生起する危機的状況や限界を打開し、超自然的聖なるものに適合しつつ俗なるものを否定し兩者を截然と隔離する生活行動において主体を再編成し統合しようとする方向をもつ。

6、曹洞宗行持規範による。

7、洞門・済家、ともに大きな差違はないが入寺開堂、結制上堂等に通用される一般的形式、順序は

拈香  
祝聖  
上堂

垂語(索語・索話・釣語)

問答

提綱

自敘(自序)

謝語

拈則(拈提)

の形をとる。(一)内は済家で使用されることが多い語)

(三) 禪の儀礼の形態

上堂法儀

禪が端座三昧の当處に仏祖得道の機縁に契合し、自の本性を徹見し、仏心印を単伝するのを本旨とするものであるとすれば、已事究明の修行と、宗旨の開演挙揚が根本とされるのは自明の理である。その意味で禪の成立期における学道の形態は、原始仏教のそれに近似したものであるといえるであろう。<sup>(註1)</sup>

教団の基礎が確立し、修道の目的や方向が定められ、清衆の依遵すべき行動の規範が必要となり、ここに清規の成立をみることになる。それは禪門に独自のものとせられるが、中国の礼樂の伝統やこの民族の在来の慣習<sup>(註2)</sup>、また既存の教団の律儀と無縁たり得ない。

清規に則った学道行法を客観化して眺める時、それが儀礼としての要件を具えていることが知られるのである。修禪に附随する諸種の行法は宗教体験を深め、信を確立するのに役立つと同時に、教団の秩序維持のために主導

的な役割を果たし、また清衆の連帯感を強化し和合を図る助けとして重要な機能を担っている。一定の象徴的宗教行動は反復修得されるうちに定型化し、儀律として厳然たる權威を担うものとなる。かくて本来証悟のための行法として実修されたものが次第に一種の儀礼へと移行し学道のパターン形式<sup>(註3)</sup>ができあがる。上堂が後に拈香して聖寿の万歳を祝禱する仏事<sup>(註3)</sup>となったこと、弘拳棒喝といった学人化導の法が儀礼的なものに変容したこと、法要の語が仏法の要旨、大法の綱要の義から仏事供養を意味することになったことなどもこれに関連した事象といえるであろう。<sup>(註4)</sup>

禪の学道が類型化し、讃仰慶讃供養等の仏事が修道上に主要な位置を占めるようになるのと併行して、仏殿その他法会を行う施設を備える必要が生じ、それが担う役割機能も次第に増大し、やがて正規の禪刹伽藍制の中に定着するに至る。しかしながら禪門では法堂重視の風潮は久しい間存続し、その影響は本邦禅林にまで及んでい

る。さて禅における儀礼を問題とする時、最も重要なそして基本的なものといえば、先に第一義儀礼に含めて一言



した、上堂法儀を挙げなければならぬ。上堂は法堂の法座に上つて演法<sup>(註5)</sup>することを指すのが通例であるが、百丈懷海が仏殿を立てずして、まず法堂を構築したといわれる<sup>(註6)</sup>ところから推して考えても、禪門においては陞座説法が、仏殿における礼拝や修懺等の仏事に優先するものであることが知られる。また徳山が仏殿を折却<sup>(註7)</sup>し法堂のみを残したといわれることも、上述の趣意を裏書きする事象の一端であると考えられ、この点においても初期仏教の行き方に類似<sup>(註8)</sup>している。景德伝燈録には弘忍が常時上堂演法した事を思わせるような叙述<sup>(註9)</sup>が見られる。しかし果してそれが原初的事実であったかどうかは明かではない。慧能は韋璩<sup>(註10)</sup>の請いにより、大梵寺講堂に於いて衆のために陞座説法したと伝えられる。彼はまた神龍三年、勅によって中興寺(前宝林)仏殿を修復したともいわれるが、それは該寺に既設の仏堂であったと思われ、禅院のいわゆる七堂伽藍の制によるそれを指すものではないであろう。この時点においては、禅宗独自の施設なりが確立していたことを証する依り所となるようなものは見出し難い。

伝燈録には南嶽讓や藥山儼の上堂についての記述もみ

禪門の儀礼(一)(長谷部)

られる<sup>(註11)</sup>が、その会下八百とも千一百とも称せられる馬祖の場合など、当然相当規模の演法のための堂宇が必要とせられたと考えられるが、その語録には法堂上堂の事が記されているから、百丈以前にも既にこの事があつたと見てよいであろう。しかし百丈によって禅院独自の伽藍の制や職位、行礼の法等が確立される以前にあっては、止住した寺院に偶々構築されていた建造物や施設を随時便宜に利用したものと思われる。百丈は学道上の体験から、有用性の度合その他を勘案しつつ、既存の制を取捨選択し、補足しながら弁道修行のための環境整備や規式の制定を図つたのであろう。

百丈下の大珠慧海や黄檗希運についても少しく上堂の事がいわれ、その後の諸家の語録にはこの事が頻出する。断片的ではあるが、これらの記述から推して一山の長老が上堂して学人を接化する学道の形態は恐らく馬祖前後の頃に始まるものとみられ、それはまた種々禅機を弄して学徒を提撕することがなされるようになったのとはほぼ時を同じくする。雪峰義存<sup>(註12)</sup>の頃には仏殿法堂、三門僧堂等の制が整つていたようである。

上堂は本来仏法の第一義を挙揚し、師資が問答商量し、

禪門の儀礼(一)(長谷部)

一大事を参究する学道の一法であったのであるが、間もなく儀礼化して今日に及んでいる。<sup>(註13)</sup> 洞門では首座法座の法戦として、済家では、晋山入院や垂示式などの中に形式的にその名残を留め、実質的には制中における祖録の提唱や、室内での商量<sup>(註14)</sup>において部分的に伝承されてきた。この上堂には、

定期的に行われるもの

三仏忌上堂<sup>(註15)</sup>

聖節上堂<sup>(註16)</sup>

旦(朔)望四節上堂<sup>(註17)</sup>

(結制解制祝禱)上堂<sup>(註18)</sup>

五参上堂<sup>(註19)</sup>

九参上堂<sup>(註20)</sup>

開爐上堂<sup>(註21)</sup>

臨時に行われるもの

晋山入院の際、祝国開堂の上堂<sup>(註21)</sup>

退院の際の上堂

出家<sup>(註22)</sup>

出郷<sup>(註23)</sup>上堂

出師

謝乘拂上堂

謝都寺齋上堂

不時のもの

施主壇越の要請による上堂<sup>(註24)</sup>、国土入寺の際の上堂

尊宿の相訪の際に行われる上堂<sup>(註25)</sup>

記念すべき行事の際、その他種々の因事上堂<sup>(註26)</sup>

が挙げられる。

それが儀礼として制度化される以前には、必要に応じて、随時頻繁<sup>(註27)</sup>に行われたものようである。わが国においても儀礼化した上堂法儀<sup>(註28)</sup>が各宗それぞれ慣例に従って行われてきたものの如く、その法式の基本は諸種の清規<sup>(註29)</sup>に詳かであるから重説の要はないが、中国では百丈清規証義記・住持章第五、所収の「上堂」<sup>(註30)</sup>の法に依っているようであり、台湾で近時印行された禅門日誦<sup>(註31)</sup>にはこれとほぼ同文のものが収録されている。

禅門の儀礼は四時季節と密接な関連をもって展開するものであるから、年分<sup>(註32)</sup>、月分等の行事の一環として位置づけられることになる。

〔註〕

1、初期仏教教団において出家者は真理を求めて遍歴遊行し

- 頭陀を修するというような学道方式によるものが多かったとみられている。儀礼に類する行法としては得度入団儀礼 *pravaraṇa*、進具 *upasaṃpada*、安居とそれに伴う儀礼や布薩における懺悔、説戒等が主たるもので、独座の思惟、修禪と託鉢を含めて学道と儀礼的なのが適宜組合わされた簡素な学道形態がとられたものとみられる。早鳥鏡正 初期仏教と社会生活 第一章—三章。
- 2、道忠は禪苑の規繩は意を朝制に取るとみなし、具体的に例証している。『禪林象器箋』第二類殿堂門二二頁上。
- 3、入衆須知
- 4、維摩經の「仏為諸比丘明説法要」、遺教經「為諸弟子明説法要」、黄檗の「伝心法要」、百丈清規「為衆開示法要」卷二。等の用例に見られるように。
- 5、『禪林象器箋』四一五頁上。行粥のため僧堂に上ることを指す場合もある。同上三三九頁。
- 6、景德伝灯録卷六末尾。百丈清規所収禪門規式。末高僧伝卷十。大正蔵五〇、七七一頁a。
- 7、「師凡住院折却佛殿獨存法堂而已」五家正宗贊。
- 8、パーリ聖典の註疏には仏堂の事が記されていないところ  
禪門の儀礼(一)(長谷部)

- から五世紀以前には仏像を安置する特別の堂宇が設けられていなかったのではないかとみられている。上座部仏教では法堂、僧堂、禪堂に当るものとしては *dhama* — *mandapa*, *parivena*, *padānāghara* がある。早鳥氏前掲書一五二頁。百丈以前における仏殿、法堂などはこの系列に属するものであろう。歴代三宝記十二、六学僧伝十七(景德伝灯録四慧忠の条等)の用例参照。
- 9、卷三末尾弘忍の条。大正蔵五一。二二三頁上。
- 10、六祖壇經、徳異本行由第一。敦煌本も同じ。
- 11、景德伝灯録 卷五および卷二十八。大正蔵五一。同上四四〇頁中。
- 12、彼は王審知のような有力な壇越を擁したから、比較的容易に所住の伽藍整備をみたものであろう。雪峰語録 続蔵 四九三頁a、本邦初期禪林の規模については禪宗編年史所収の建長創建入仏記参照。
- 13、上堂の儀礼化は北宋頃に始まり、南宋代に一般化したのではないかと思われる。わが国では栄西には上堂乗仏のことがなかったとされる。『禪宗編年史』一二八頁、無住国師、雑談集八。
- 14、上堂は仏陀の説法の如く公開講座の形式をとる。師家の

禪門の儀礼(一)(長谷部)

- 学人化導において、隠蔽された室内の事が主となったのは日本中世仏教の口伝主義、秘事法門的風潮と関連するものであろうか。
- 15、勅修百丈清規 卷二 二四二d。古くは成道会には後夜上堂が行われた。慧日清規行令規法。
  - 16、象器箋 四九八頁、四二二頁。永平広録に宝治二年、天申節に際しての上堂の事が記されている。
  - 17、入衆須知 十六―五統藏 四七七頁b。歳旦上堂の事は、浄慈自得語録、卷一、統藏四五七頁b、四五八頁c、如浄語録 卷上等に見えている。
  - 18、安居結夏上堂 同上四五九頁a、解制については同四六〇頁c。
  - 19、叢林校訂清規總要 卷下、統藏第一輯第二編第十七套一冊統藏一四頁c。象器箋四一七頁上。本邦でも五五上堂の制あり、慧日山古清規行令規法。
  - 20、証義記卷八 四三〇頁a。自得理語録卷一、統藏 四六一頁d。
  - 21、勅修百丈清規 卷三統藏二五三頁d。
  - 22、象器箋 四二二頁上。如浄語録卷上。
  - 23、象器箋 四二二頁下。如浄語録卷上。
  - 24、臨濟録 百丈清規卷二統藏二五〇頁c d 概古録三七〇頁
  - 25、勅修百丈清規 住持章第五乙 二五〇頁a。
  - 26、象器箋 四二二頁下。如浄録の到着に際しての上堂のとき、建撕記下。授戒に随伴する上堂。
  - 27、百丈語録に「師毎上堂常有一老人」云々とある。統藏本には「毎日上堂」とす。四一〇頁a。
  - 28、受請陞座の項に常に上堂の式の如し云々とあり。統藏二五一頁d。長老上堂の時大衆は衣を具し立って聞法す。古清規序、黄檗清規  
ただ五参上堂の場合は拈香せずといわれるが、これは学道法としての上堂の本来の意義を残すものといえよう。  
勅修百丈清規 統藏 二四六頁d。
  - 29、禪苑清規 卷二統藏 四四三頁a。勅修百丈清規、住持章 第五。統藏 二四六頁c。及び上掲の諸文献。
  - 30、統藏 三二八頁C。
  - 31、国際仏教文化社、民国五八年刊。
  - 32、南宋僧林においては上堂が頻りに行われたようである。いま語録によってみるに巨望上堂の他に、端午、秋旱、中秋、冬至、歳末、等季節に因む上堂、結夏、安居半夏、解夏、浴仏、臘八等仏事に因む上堂、某禅客至上堂、請

首座、謝新旧両班、謝知事、帝忌、出郷、出隊、祈晴、  
建衆寮等種々の因事上堂が録せられている。本邦禪林上  
堂の制もほほこれに倣ったと思われるが、江戸時代には  
上堂に換えて普説示衆、小参が多く行われたものよう  
である。東林録、建康普説等参照。  
伊藤俊光「永平広録における三物上堂について」宗学  
研究第三号、伊藤俊光「永平広録における上堂について」  
宗学研究第六号、永平広録註解全書索引 四八―五一頁。

禪門の儀礼(一)(長谷部)